

平成27年度第6回岡山市総合教育会議

日時：平成27年12月1日（火）

場所：市庁舎 第3会議室

○司会 定刻となりましたので、ただいまから平成27年度第6回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日の会議は、全員の御出席により成立をしております。

傍聴の希望がありますが入室を許可してよろしいでしょうか。

（「お願いします」の声あり）

○司会 傍聴者の入室を許可します。

<傍聴者入室>

○司会 それでは、早速、協議事項に移らせていただきます。

まず、(1)「有識者からの意見聴取について」でございます。

本日は、市内において、ゼロ歳児から大学院生まで一貫した教育を実施しておられる、学校法人就実学園の理事長、千葉喬三様をお招きしております。

千葉様は、森林生態学や緑化環境修復に係る研究に邁進される傍ら、国、県及び岡山市の各種審議会等の委員として地域の発展に大きな貢献をさせていただいております。

また、岡山大学学長、そして現在は就実学園理事長として次世代の教育に力を注いでおられるところです。本日は、岡山市の子供たちの教育の向上のために、有意義なお話をお聞かせいただけるものと存じます。

それでは千葉様、よろしく願いいたします。

○千葉理事長 千葉でございます。紹介いただきました。儀礼的じゃなくて恐縮しております。

この会議は、初等・中等教育が対象になるのだと思ってまして、余り自分自身が小学校・中学校の生徒でいたころ以外には経験がないもので、そんな世界のことを口出ししていいのかなと、1つでございます。これまでの5回でいろんな検討をされてきている上に、私のような者が出てきて、何をしゃべったらいいのかなと大変戸惑っております。でも、日ごろ考えていることを、思いつくままにお話することで許していただきまして、しばらくお時間をいただきたいと思います。

2階から目薬を差すような話から始めますが、私は生物学をずっとやってきて、人間も生物ですので、生物一般論の特有の性質、共通の性質を持った生物の1つとして人間を見るくせがついてます。そういう形で見ますと、生き物たちは、共通して1つの宿命というのか選択を持っています。それは生き残ることなんです。自分自身が生き残ることと、自分が属してる種と私たち言いますが、集団。猿なら猿、亀なら亀、それが生き残っていくことは唯一の命題として運命づけられてるわけです。そのために生物は、それぞれにどうして自分が生き残って、自分の遺伝子を残していくか、本能の中で遺伝子の中に取り込んで、自分たちで生き延びてることをやっています。

ところが、だんだん生物が進化していきますと、個で生きることをできるだけきちっとやるために、集団で生活になってきます。人間の少し前にはお猿さんがいて、お猿さんは集団という社会をつくって生きていく戦略をとるようになります。人間は社会性の動物の最たるものです。社会性の動物になってくるとどこが違うかというところ、結局、個人個人の能力、あるいは個人個人が持つてる遺伝子だけじゃなくて、自分の属してる集団を使って生き延びるという形に変わってくるわけです。そのほうが、はるかに生き延びられる確率が高くなるということを、進化的に身につけてくるわけです。

集団で生きる限りは、集団と自分という2つの違った生命体を維持するルールをつくらなければいけなくなるわけです。それをうまくできない種は滅んでいくわけで、それをうまくつくれた種だけが残って行って、そのためにやっているのが、実は年長者が、年少者、次の世代に対する教育です。教育というのは、私はそのように捉えています。全体の集団が安全に効率よく発展的に生きていく、存続するための社会性を持つ。社会性を持ったときには、当然、社会のルールと個人の生き方の2つのスタンダードが満足していかないといけない。それをうまく調節するには放つといってもできない。これは何らかの仕掛けをしてルールをつくっていかないといけない。それが、教育だと思っています。

これは社会性をとってる生物、特に動物に言える、必ず程度の差はあっても社会全体と個の調和をやってる。それを教えてやっていく。あるいは猿のように、実の親だけでなく相当の年代の世代が、この世代を集団として教える教育システムをしています。人間も同じことで、それがうまくできる社会とできない社会では、社会の質というかレベルが変わってきます。

そういう目から見て、今の日本の教育のあり方に関して、すごく危機感というか不安

感があります。いろんな国を見てきまして、あるいは報道に接し、外国の学校の先生や友だちと話してまして、この国の教育は非常に危ないとずっと思っています。大学にいましたので、今でも日本の大学は世界で一番危ないと思うし、そのことを何とかしないといけないとずっと考えてたんです。大学に入る前の日本の初等・中等教育は、やはり諸外国、特に発展著しいアジア、東アジア、南アジア、東南アジアと比べても非常に不安だという気がします。

そもそも自分の次の世代をきちっと育てておかないと社会が持たないわけですが、育てることが何なのか、残念ながら教育の現場で理解されていないのではないかという気がします。

人が育つのは、例えてみれば、樹木が育っていくのと同じだと思ってるんです。樹木は成長点を2つ持っています。1つはこずえです。一番上端のところ。できるだけ高くなって、太陽の光を隣の植物よりたくさんとろうとする。成長点が必ず上にある。高くなるのが1つ。もう一つは横に太っていくんです。成長点が横にもあるんです。考えてみたら人間も一緒だなと思っています。個人を高く伸ばすのが学力の修得。学力をつけてできるだけ伸ばす。もう一つ、木の幹に当たる部分、太らすのは、これは人間そのものの中身を充実させていく。

この両方が、実は教育なんだ。それができてないと、やたらに頭でっかちといいますか、学力だけを考えるとやせ細った木ができてしまう。学力を太らせないで、人間性を教育すると称して人間のエゴばかり教えてると、とんでもないメタボができてきます。そういうことを考えると、縦横のバランス、人間として成長する部分と高等生物として学力、知識といいますか、先人たちがつくってきた学問体系を身につける、2つを同時にやらないといけない。両方ができてないと、本当の教育ができてないなと思っているわけです。

特に、40年も50年もたった木は、そんなに変えようがないんです。急に高さを伸ばしてみたり、太らせてみたりすることはできない。できるのは幼少期です。樹木にすれば、せいぜい2メートルから3メートルになるまでの間に、その木の将来が決まる。同じことが、人間教育にも言える。学校と家庭との役目が、ちょうどそれに当たるんじゃないかなと思っているのです。

学校は学力をつける、背を高く伸ばしてやるということがもともとの目的で、やり過ぎないとか人間的に大きくなるというのは、昔は家族なり家庭の中、あるいは地域で

行われていたと思っけてます。それが、そのバランスが崩れてきてるんじゃないか。

学校側からすれば、学校でしつけまで見切れないよと言われるだろうし、家庭は家庭で、共稼ぎで余り時間のとれない、おじいちゃん、おばあちゃんもいない、核家族化してるところで、子供を人間として育てないといけないところは、学校側にお願いをして、学校に入れてるんだからやってくれるだろうという話になって、ミスマッチが起こっている。そのはざまに落ちてるのが子供たちと思っけてるわけです。そうなると、どこから手をつけていいのかということになってくると思っけてるんです。

世の中の事象は、自然科学系にいた人間は、原因があつて、その結果として今の現在の事象が生まれているという因果関係で説明できるものだと思っけてきたわけですが、学校と家庭、学校と子供たちの関係は、ニワトリと卵みたいなところがあつて、どっちがどっちなのかわからないという気がするわけです。

学校から言わせると、家庭がしてくれないんだから、学校でこれ以上できませんと言っけし、家庭は家庭で、学校にちゃんとお願ひしてるはずなのに何もしてくれないじゃないかと押しつけあう。もつとやうと、子供と先生の間にもニワトリと卵的な話があつて、先生側から見ると、ちゃんと教えてるつもりなのに少しも成長してこないですからやりにくい、子供が。子供側から見ると、先生を全然信頼できない、ついていけないと思っけてしまう悪循環のようなものがあつて、どちらが先だったのかわからない状態になってしまつていて、このために教育問題は、なかなか手をつけられないし、手をつけてもなかなか効果が出ないのではないかとやう思っけてるんです。

でもよく見てみると、学校側と家庭、先生と生徒、その2つの命題に共通して出てくるのは学校なり先生なんです。だから、ニワトリと卵、どこから先にするかという、学校なり先生から、まず考え方を変えたり手を差し伸べていく行動を起こさないと、このループは正常な回り方をしないとやう思っけてます。まず、学校の現場で何とかできないのかということを考えるべきだろうと思っけています。

今、学校の先生方が大変忙しくて、人間を教育するところまで、とてもじゃないけど時間が持てないと聞いておりますし、そんな簡単ではないことはよくわかつてるんですが、でも手をつけるとすれば、そこから物を始めていくことしか、これを正常なループに戻すことはできないのではないかとやう思っけています。

自分の大学での経験から、その子はその子の理解の仕方とかスピードがあつて、普遍的な、通り一遍のやり方ではだめだということがわかつて、この子にはやういふ教え

方をしないといけないと経験的にわかってきて、結局教育はそういう作業をやることなんだということがわかってくる。多分、初等・中等の子供たちも同じことだろうと思うんです。

理解できるようになると、子供たちに自信が出てきます。自信を取り戻すことができるんです。それが一番大事なことで、手間がかかっても、その子に自信なり、逆に言えば劣等感みたいなものを少しでも取り除いてやることができれば、あとは放っておいても、よほど問題を持っての子でない限りできる。本人自身に、自分が理解できたということを経験させれば、それが自信になる。いろんな子供を見てまして、ついて来れないところを切ってしまうのではないかなと思う。

家内はしばらく高校の先生をしていて、ちゃんと理解させてやらないから子供がついてこないんだ、理解さえすれば、どんな子供でもちゃんとついてくると言うんです。小学校、中学校で問題児化していくのも、教室のみんながいわゆる等速度で進んでいる授業についていけないと思った瞬間に外れていく、自分もついていけてるんだと思わせておけば絶対大丈夫だと。

人はそれぞれ得意な分野がありますから、例えば算数でつまずくと、国語とか得意にしているものまで自信を失ってしまっただけでできなくなって、結局勉強そのものを、自分が必要性とか、やらないといけないという意識まで放り出してしまう。そういうことを考えると、わからせてやる。ちょっとしたことが、現場でやるかやらないかが大きなことになってくるんだと思ってます。

初等・中等教育をやったことないと申しましたけど、30年以上、自然教室をやってまして、そこで自然を媒介にして、子供たちといろんなつき合いを、ここ10年は忙しくてやってませんが、やってきました。

吉備少年自然の家で6年間、小学校4、5、6年の子供たちを3泊4日で、夏と秋と預かります。高校の先生、中学校の先生、自然の詳しい方7～8人で教える。そういう合宿経験をしました。子供たちがどういう状況でどういう反応をするかというのは、多少は経験して知ってます。

子供たちに、鳥の声を聞いて鳥の名前を覚えるとか、虫の採取をすると蛾の名前を教えるんですけど、子供たちは、本当はおもしろくもなく、10%ぐらいはマニアがいますけど、ほかの子は、何でこんなことを自分は勉強せなあかんのかと思ってるんです。

そのときに、例えば蛾を見せて、この蛾とこの蛾とどう違うか、あるいは蛾と蝶々はどこが違うのかと言うと、ふっと顔を上げるんです。人の話を聞こうとし出すんです。そこで、蛾と蝶々を1番分けているのは触覚が違うんだ、触覚がどういうもので、あなた方は舌で味わって、蛾は触覚で味見てるんだという話をし出すと、だんだん目が変わってくるんです。

次は、これはどうなの、これはどうなのと聞いてくるわけです。花の構造を話しても、初めは、そんなこと聞いて何になるのという顔してますけども、何で花にはおしべとめしべがあるかとか、花には色がついてるかとか、虫と花はどんな関係にあるかしゃべってやりますと、どんどん乗ってきて、じゃあこれはどうなの、これはどうなのと、こういうぐあいです。そのうちに、見てるとおもしろいのは、6年生の子は早く理解するんです。そうすると、4年生の子に教えてるんです。あるいは、さっき先生そう言っただろう、とかやってるんです。嫌々やってたのが、すごく顔が変わってきます。

一番感激したのが、全部終わらまして、最後の日に複数の子が自分の親を引っ張って私の前まで来て、この先生に、こんなこと教えてもらった、こんなこと教えてもらったと、すごく得意げに言うんです。帰りがけに手を振って、ありがとう、ありがとうと帰っていくんです。あれだけ子供が、こっちが言おうとしたことをわかってくれて、それ以上に、私を人間として信用してくれて、先生、先生と言うてくれるというのは、これはすごく教師名利というか、教員やっててよかったなと思う瞬間です。

今の現場の小・中学校の先生方は、残念ながらそういう経験を余りする機会がないのではないかなと思います。だから先生にとっても、自分は教育したという実感をなかなか持てないだろうし、子供たちにとっても、学校は行けと言うから行ってるだけだということになってしまう。この辺がニワトリと卵の話で、どこかで輪を切らないといけない。先生側からやるよりこれは仕方ない。

ただ、それを今の学校制度の中で、先生にそれをやれというのは酷なことで、とてもじゃないけど時間がないし、できないということでしょうけども、先生方はしんどくても、それが先生の使命であり、それをやり切ったときに先生の生きがい生まれるんだろうということを、改めてもう一度認識してほしいなと思います。

そうは言っても、物理的に足りない時間をどうするのかとか、その辺をどうするかという話になるわけですが。1つは、うちの学園で、言ってるんですが、本当にやらないといけないことなのか、やらなくてもいいことまでやっているのではないか。だから時

間が足りないんじゃないかと。いわば仕事の棚卸しみたいなことを、本当にこれが必要なことなのか。その必要性をどこではかるか。それは預かってる子供たちにとって必要なことなのか。もっと言えば、うちの学園にとって、それが次につながるようにという観点から見て、必要なことなのか、一度棚卸しをすることが大事だろうと思います。

その上で、なおかつ足りないときにどうするかというのは、この間も、岡山の大学のコンソーシアムを岡大の学長のときにつくったわけですが、今17ですか、利益相反してる組織を1つにまとめて何かやれと言っても、それはできません。それをつくったときは、岡山県の高校卒業生の7割近くが県外に出てしまう。県外の大学を選んでしまう。それってものすごく残念だし、岡山県で高校教育を受けた子は、できるだけ岡山県の大学でそれを受けとめてやりたいと思って、そのためのプラットフォームとしてコンソーシアムをつくらうということで、各大学の学長の先生のところを回って、随分反対もされましたけど、とにかくスタートして10年たったんですが、いまだにうまく機能してると思えない。

そのときに、水平でものを考えるんじゃなくて、大学と中・高、小・中というか、そういう縦の関係の中で大学を置いてみたらどうだろうかという話を10周年記念のときにしました。IPUの大橋さんがそれを聞いておられて、同じことを考えていると。今の現状を何とか考えてる先生は気がついてるのかなと思ってたんです。

もう学校の先生は手いっぱい、家庭もいろんなことがあって、もうこれ以上は、子供の人間教育とか何かしたいんだけどできない。あとは、よそからそれをやらざるを得ないとなったら、今一番そういうことをやらせていいのは、大学の学生じゃないかと思うわけです。彼らも、きちっとそれをやらせばできるはずです。どこの大学にも、そういうことをボランティアでやるクラブ的なものができてます。彼らのアイデンティティをきちっと認めてやって、そして彼らがそれを生きがいにする。自分たちが社会に出て育っていく、人間の自分の成長の糧にそれをはめ込んでくれるようなことをうまく制度としてつくれば、これは、かなりいろんな問題が整理できるんじゃないかなと考えてるわけです。

ぜひこれは、対立行動になって押し合いへし合いになってるところを崩していくために、1つの契機としてそういうものをつくって、その上で、直すべきところと見るべきところをもう一度やっていく。

誰が責任があるとかいう責任論に持っていくのは意味がないことで、できるだけ整

理をした上で、できないことをできるような話に持っていく。そのためには、いろんな社会資源を使う。伊原木知事が地域の力を使ったらどうですかと言ったことがあるんですが、地域の力といっても、時間をたくさん持つてるおじいちゃん、おばあちゃんたちが地域にたくさんいるんですが、なかなか難しい。

それよりは、やる気のある学生をそういうところに入れて、子供たちにとっても安全で有効な制度をつくってやるのが大事だろうなと思ってます。特に、勉強、学力を教えるのではなくて、塾の先生をやるんじゃないで、人間として自分が育ってきた道を振り返りながら、そういう役目を、いわば家庭の役目に近いものを彼らに期待したらどうか。子供たちも、学校の先生よりは、もうちょっと年は若いですから、お兄ちゃんお姉ちゃんの認識でいけますし、学生たちにとっても弟・妹という感覚でいけるだろうと。

そうなると、一番大事なのは学生さんたちをうまく使って。彼らは移動していきますから、1人抜ければ1人補充するという形で、移動するものを全体として安定的につかまえていく。そのためにどうしても受け皿となる組織が要りますから、そのことをやれば、よその地域にはない、子供をみんな育てるといふか、次の世代を担ってくれる子供たちは、広く、できるものは全員が手伝う。その中で子供たちに自分が生きてるといいますか、自信をつけさせる、決して自分が落ちこぼれてることを感じさせない子供たちを、1人でも多くつくっていくことをやったらいいんじゃないかなと思ってます。

これはできます。うちの大学の先生方で、既にそのクラブ持つてるんです。ただ、同好会的にやってるわけです。もう少しきちっと、自分も子供の教育、あるいは日本の子供たちの、次の世代の教育に自分たちも参画してるんだと、学生にもそういう気を持たせて、決して負担させてはいけないと思いますけど、そういうことをしていく。あらゆる手段を使ってみることを、一度考えてみるべきではないかなと思う。

それも、いきなりきちっと、初めからガチガチの組織をつくって、4月1日からやりますという話ではなかなかいかないし、むしろできそうなところを取り上げて、成功体験といいますか、うまくできたよできたよという小さな成功例をたくさんつくっていくことで、このやり方を現実化していく、広げていく方針がいいと思ってます。とにかく1歩踏み出さないことには何も動きませんから、早くそういうものをつくって、とにかくやって、うまくいかなければ直す。それをやってみたいと思う。

少し話がずれますが、日本の社会が、欧米社会というか今は東南アジアの社会にも負けてると思うことは、やったことのチェックをしないです。政策の事後評価をしない。

よくP D C Aサイクルといますが、P D C Aサイクルで一番難しいのはCです。チェックが動かない。

P D C Aサイクルという言葉在教育界に持ち込んだのは、僕が初めてだろうと思うんです。日経の横山さんという教育担当の人がいた。彼が、私がどこかで講演したときに聞いていて、先生、文章書いてと言われて書いたことがあります。まだ副学長のころだと思います。教育の問題を考えると、実業界では当たり前のP D C Aという概念を加える、1つも日本の教育で起こっていないと書いたんです。

日本人の一番嫌なことは、自分がやったことを、他人からどうのこうのと言われることで、それをやらないと絶対に次のステップに上がれない。P D C Aサイクルは上がらない。いいところも悪いところもわからないで、それを放っという次のことをやるのは、効率が悪い。だから、一番大事なのはチェック。もし、学生を使う時にも必ずチェックをする。どこがよかったか、どこが悪かったかということは必ずチェックをするよと、そのことを同時に決めてやる。

岡山大の副学長のときに、教員の業績評価を全国の大学で初めてやって、猛烈な批判に遭いました。結局、先生方が1年間なり5年間なりやってきた教育の成果だとか研究の成果をチェックする。大学の先生の話ですけど、先生方は皆一国一城のあるじなんです。俺に物を言うやつがいるのかとと思っているわけです。そんな先生を、第三者的に誰かが、研究の成果だとか教育成果をチェックするなんて、彼らにとっては全く思いもつかないことで、とんでもないことを言うやつだと、200人ぐらいだと思うんですけど、4回ぐらい説明会をして、そういうことやりますよとやったんですが、もう怒号に包まれました。それぐらい、皆、自分に自信持ってるんだなと思ってました。しかしふたを開けてみると、やっぱり仕事してないやつはしてないです。だめなんです。これはきちんとチェックをやらないといかんなと思いました。

アメリカ人の友だちがいて、大学で教員をしてるんです。実は教員の評価をしようと思うんだけど、アメリカではどうして評価してるんだと聞いたんです。話が全然通じないんです。だんだんわかってきたのは、向こうが言ったのは、おまえのそこはエバリュエーション（評価）してないのかと言い出した。いや、してないと。日本の大学はどこもしてないよと言ったら、彼が言ったことは、よくそれで給与が決まるねと言ったんです。意外なのは、国立大学でしたから、それは政府が決めるんだと言ったら、政府はどうやって決めてるんだと言うんです。それを聞いたときに、彼我の認識の差といい

ますか、やった成果に対して給料が出ることが当たり前の世界と、一旦自分がステータスになってしまえば、誰からも口を出させないことで閉鎖的になる世界。そのどっちが社会の変革についていって、新しい社会を展望できるか、もう歴然としてます。そのことを考えても日本は随分おくれる。

もう一つ、アリゾナ州立大学へ行くことになりまして、その隣のサンダーバードという、ビジネススクールとしてはハーバードに次いでぐらい有名なところで、副学長が出てきまして、学長と一緒に飯食おうと呼んでるからというので、呼びにきたんです。学長のところへ行ったら、メインホールで、入り口のきれいなところに日本の掛け軸みたいな紙がぶら下がってるんです。よく見ると、どうも名前が連ねてあるんです。これ何だっけ聞いたたら、笑って言わないんです。幸せの指数みたいなことは言いました。要するに、給料の高い順に教員の名前がずらっと書いてあるわけです。一番上が学長かと聞いたたら、いや、違うと。何でこんなことするんだって聞いたんです。そうしたら、笑って、誰もしたくないよと言うんです。でも、学生がするんだと、仕方ないだろうと。

学生はクライアント、お客さんで金払ってるんだ。金払ってるやつが何とかコミュニティという委員会をつくって、事務所へ行って給与一覧表を出せと言ったら、出さざるを得ないと言うんです。出た瞬間に掛け軸になるんです。こんなことをして何がメリットがあるんだと言ったら、いや、学生がこれを見て、大学を決めてるんだと言うんです。教員同士が順列を見てるらしいんです。だから頑張るんだと。もっとおもしろかったのは、ここから下は来年いないんだと言うんです。すごい厳しい評価社会なんです。言ってみれば当たり前のことで、お金を払ってる人に対してどれだけの成果が出たかやってきた。講義室でも全然違うんです。もうピリピリしてるわけです。講義中に、勝手に手を挙げて質問したり。その質問をめぐってみんな、先生が一方向的に教えてるんじゃないかと、完全な討論会になってしまうんです。そういうことが平気で起こる。

カナダを経験したときに、ここでは絶対に教職につかないでおこうと、こんなところにいたら死んでしまうと。日本に逃げて帰らないといかん、もたないと思ったんです。でも、それをしないと、あそこは首さえつながらないという世界です。

いかに先生自身がプロ意識というか、自分自身が経済的と同時にプライドとして、教員としてのプライドをいかに維持するか、学生から評価してもらわないかん、学会で論文を書いて学会から評価してもらわなければ教員としてプライド、職業を変えないといけないわけです。それぐらいのプライドを持つてるとこと、やっぱり日本は、特に大学

の先生は甘い。一回先生になってしまうと。先ほどのP D C Aサイクルやる、変えたほうがじだらくにならないということが国全体で起こっているんじゃないかと思ってまして。

そういう意味では、岡山は、学力ですけど、あんな数字が出てきたりしていますから、これはいい機会だ。ここで本当にこの問題を何とかして解決しようというぐあいに、関係者が皆考えてやるいいシグナルが出てるぐらいにとったほうが、僕はいいと思うんです。これをどうするこうするというよりも、とにかくこれを何とかする。岡山だけじゃなく日本全体でやらないといけないわけですけど、やはり岡山はほかの地方にない大きな特色を持ってやり始めるということ、それこそが教育県岡山と言われてきた真骨頂であると思います。

話を私しましたけども、もし何かできることがあればやらせていただきたいと思ってますし、ぜひこの事態は、どこかでニワトリと卵の負の連鎖を断ち切らないといかんと思ってますので、今日は勝手なことばかり言いましたけど、そんなことを話させていただきました。

○司会 議事の進行は、会議の招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしくお願いたします。

○市長 千葉理事長、ありがとうございました。

最後の評価は、非常におもしろいというか、怖いという感じがいたしましたが、皆さん方、御質問、御意見ございましたら、お願いたします。

○塩田委員 貴重なお話をありがとうございました。身につまされるところもありましたが。教員が変わらないといけないと言われてましたが、先生は岡山大学でF Dに力を入れられていたと思います。一番効果が上がったF Dはどういったことなのか教えていただきたい。

○千葉理事長 まず、F Dが日本では間違っって訳されてると思うんです。ファカルティ・ディベロップメントで、ファカルティは、日本では教員の集団と訳されてますけど、実はそうではなくて、ファカルティは教員個人です。向こうでは教員のことをファカルティといいます。僕はカナダの大学にいたときびっくりした。ファカルティクラブがあって、そこへ入れと言われて。学部のクラブみたいなものに外国人の僕が何だ、いや、おまえだと言うんです。教員そのものがファカルティなんです。だから、ファカルティ・ディベロップメントは個人の指標なんです。学部で教育のシステムを考える

とか、そういうことを彼らは言うてなくて、本当にマンツーマンで教員を指導します。

カナダもそうですが、教授になるときにテニユア、永久教授権といいますか、一旦それを認可されると、そこでは教授としてずっとおられる、それは厳しい審査を受けるわけです。助教授クラスでこれほと思うやつには、学部長あたりが教授の指導者を複数つけるんです。個人の能力をテニユアが受かるぐらいまでにやって、文章の書き方から教え方とか全部面倒見る。複数の先生が指導するんです。それがファカルティ・ディベロップメントです。それでうまく先生がテニユアに受かると、指導した人の業績になるんです。

そういうことから考えると、日本のファカルティ・ディベロップメントは少し違う。平成13年ぐらいから、学生たちが、学生による教員の教育の仕方のディベロップメントをやらせようと。学生さんクラブでこんな講義が欲しいとか、あの先生が欲しいとか、部屋を貸してくれと言うわけです。聞いてると、まことに当を得たことを言うてるわけ。

というのは、講義を受けるほうが、講義するほうに対して注文つけてるわけですから、すごくダイレクトなんです。あんなことやってほしくないとか、あの先生が逃げてるとか、みんな言うわけです。それ聞いてて、これはおもしろいと思って。学生によるFDを、教務の事務を出させて、教員も出させて、そこで出た話は実行しなければいけない。もちろん精査します。ただ単にしゃべりっぱなしにしないいうことをやったんです。随分とそれによって変わってきたと思います。

昔GP、今は名前が変わりましたが、プログラムを持って行って、こんな新しい試みがありますからお金出してくださいと出すと審査を受けて、金がつく制度があります。そのとき、僕、学長になってましたので、学生によるFDを持っていったんです。書類審査で通って、最後のヒアリングだけ残ってたんです。行って、驚きました。10人ぐらい審査員の先生方がいて、私学のそうそうたる学長とか理事長されてる方が、真ん中にポンポンと座ってるわけです。そのときに、まず質問が出て驚いたのは、岡山大学は生協があるのかねって、いきなり聞かれたんです。あなたのところは、共産党だろう、それはと。教育とはわかつとるのか、と。教育は上から下に水流すようになるもんだよと。下から上へ上がることはないよ、それをやるのは共産党だよと言われて。

皆、お名前を知ってるそうそうたる方です。これが日本の教育の現場の感覚なんだと

改めて知りました。それでもあんた方は教育者かと言おうかと思ったんですけど、本当に切れかかって、あほらしくて返事もしないで帰ってきた。

そういうことで、FDもさっきのチェックなんです。チェックシステムの1種類なんです。先生にとってはやってほしくない。でも、やらなければディベロップしないわけですから、それを常にチェックするというか、そういうシステムが。

ファカルティの話が出てきまして、ついでに、日本でAO入学。AOのAはアドミッション・オフィスなんですね。アメリカの大学もほとんどそうですが、アドミッション・オフィス、統括部本部があって、そこは先生も統括してるけど学生も統括してるわけです。入学者はそこが一括して入れるわけです。3,000人なら3,000人入れて、そこが、おまえは理学部行けとか振り分けてるわけです。日本の大学なんか学部が皆、自分の入学者を決めてますけど、そんなもの一切やることない。全部そこに権限が集中してるわけです。そこが、FDもみんな仕切ってるわけです。

そういうのが必ずしもいいとは思ってませんが、どこかで誰かが見てるといいますか、成果は必ずどこかでチェックされる。それは誰のためかという、それは授業料を払ってる学生、あるいは税金を出している州なり国がそれをチェックするシステムにきちっとなってるわけです。

学校の先生も、現場の先生はしんどいでしょうけど、いつでも物を買えば必ず領収書を書かないといけないという意識を持ち続けられないと思うんです。初めはとんでもなくしんどいことですが、やり始めれば、うまく純回転が始まったら何でもないことだと思うので。やっぱり初めの動輪が1回回るまでがしんどくて、それを何とかして動かしてみたいなど。

○市長 中学校、高校で、そういうチェックシステムというか、エバリュエーション・システムをやっているとあるんですか。

○千葉理事長 向こうはないです。大学だけが特別なんです。初等・中等教育と、日本では完全に初等・中等と高等教育で簡単に分けてますけど、教えることの意義づけとか意味がまるきり違う。本当をいえば、初等・中等なんかよりは、学校もつくらんでいいという話できていたところですから、むしろそこら辺は日本のほうが進んでるんです、学校システムとしては。もともと、教育は大学でやるということですから。

○市長 ほかにどうでしょうか。

○藤原委員 評価システムのつながりで、今、全国的に、小学校・中学校もPDCAで動

こうと、評価システムは動いてるんですよね。給与に反映される都道府県や、賞与や、いろいろな差はあるんだけど、ただ、ダイナミックさが、先生が言われるようなところには、まだ行き着いてないかもしれないです。校長が面談をして教員の評価をする、教員一人一人はPDCAで動かしている、学校全体のマネジメントも動かしていると、そういうところは少し入りつつあるんじゃないかなという感じはしています。

○千葉理事長 問題は、外部のチェックを受けないといけない。教頭先生、あるいは校長先生という内部チェックでは余りやっても意味がない。外部って誰だ、本当は親だとすると、これはまたさっきの話に戻ってしまいます。そういう対立構造をつくるんじゃないくて、いわばアドバイザー的にチェックする第三者機関をつくって、初等・中等だけじゃなくて大学も本当はそうしたほうがいいんです。

そういうところを通して、その上で学校の先生はこれだけ忙しくて、いろんなことをやって、これだけの成果を出してるんだ。これ以上学校の先生に要求をするのは無理だと言え、皆さんも納得するし、対策も考えられると思うんです。皆さんが、評価をしてるんだらうけど、余り信用してないというか重きを置いてないのは、要するに内部的にやってるだけだらうと。私らの目から見ても、本当に学校がやってるというなら見せてくださいよと、そういうことを言われてると思うんです。第三者機関みたいなものをつくってやればいいと思うんです。

○藤原 学校評価で少しだけ言うと、第三者、今の先生がおっしゃるようなことを入れようということで、少し委員会が立ち上がったたり、保護者からの評価を学校が受けて、それをオープンに返す、ホームページで返すとか文書で返すこともできてるんだけど、今言う厳しさとか、もう少し違う観点は足りないから、今、先生が言われた学力状況調査の結果を踏まえての、いいチャンスだなというのは、そういうところももっと生かしていかないといけないのかなと思います。システム自体は次第にできつつあるというのは、あるかなと思います。

先生が樹木に例えられた、本当に何となく私たちも思ってきたことなんだけど、専門家の先生から樹木の成長点と例えられると、本当になるほどなと思いました。そのときの自尊感情、自己肯定感に関するお話をされたんですけど、本当に岡山の学力の状況調査の中にも大きなポイントとして考えてるんです。

1週間ぐらい前に、経済同友会がさん太ホールで学力のフォーラムをされたときに、パネリストの1人で来られてたのがビリギャルのお母さんでした。そのお母さんのお

話やパネリストのほかの方の話で、共通点は自尊感情だったんです。やればできるといふことを先生がどういうふうサポートするか、もちろん家庭の中でということだったので、経験者は、本当に当たり前なことなんだけど、ああいう方が言うと、さらに納得という感じがしたんです。今日改めてそういうことを感じました。

○千葉理事長 昔からよく言います。おだてたらいいと。あれはもっと軽い意味で言っているといるんですが、子供って大人と同じだけの自尊心持ってるわけで、その自尊心さえ潰さなければ、自然に伸びていく。ちょっとしたきっかけで、例えば分数がわからないとか、比例の考え方がわからないとか、そんなところでつまづいてしまうとずっとだめになってしまう。英語でしたらアルファベットを書くんだけど、fとbがちゃんと書けなくて先生に注意されたとか、そういうことをきっかけにしてやる気をなくしていくんです。

1つそうなると、あと全部放り出してしまふ。昔ならば、そういうことやれば生き死にかかわったんですけど、今はブレーキもかかりませんから、ついついそうになってしまう。一旦なってしまうと、引き戻すって物すごいエネルギーと時間がかかります。

そこを、もう少しその子のきっかけを、できるだけ早くなくしてやるというか、摘んでしまふ。それは、ぜひ現場の先生に目を光らせていただいて。一番大事なのは子供たちに結論を課さない。悪く言えば、おだてても構わない。とにかくそういうことを現場でやっていただけたら、子供たちは伸びる、遅速はありますが、中学校で伸びる子と小学校6年からやってる、そういうことは個性として出てくると思うんですけど、潰れることはないと思うんです。

また植物の話ですが、種から育てるんですけど、後々まで残るのは種の時代に与えた傷害なんです。大きくなってくると修復して、少々枝が折れても。でも、種のとときにちょっとした傷がつくと、一生ちゃんとなれない。だから若いときほど、生物と共通の話でいえば、負の問題をつくらない。伸ばすことは幾らでも伸ばしたらいいんですけど、そんなものは勝手に伸びていきます。教育現場で負の資産を持たさないというのが、一番大事なのかなと思います。

それさえすればどんどん伸びてくる。別に伸びた子供を後で見ると、やっぱり教師でなければ味わえない充足感ですよ。それを先生方に持っていただいて、自分たちはそういう作業にかかわってるんだと。一々目で見えてこないけど、例えば10年先とか何かに。

うちの小学校はいまだにまだ同窓会やるんです。先生が、私のえとで1周り上ですから、それが来るんですけど、やっぱり出る話はそういう話です。いまだになって、おまえはあのときあれやって何だと先生に言われるわけです。でも先生が、ちゃんとやってくれたわと喜んでるんです。ああいうのを見てると、やっぱり教師はちょっと特別な仕事なのかなと。考えてみればよそで経験できないことなので、先生方には自分たちがいいところにいるんだという自負心でやっていただければいけないと思うんです。

○市長 予定の時間が過ぎてますが、最後に千葉先生に、どうしてもここでお伺いしたいということがあれば、お願いしたいんですけど。

○山脇教育長 先生が最初に言われた、樹木に例えられた話もあったんですが、結局、今日本の教育の危機というお話の中で、危機が、今、個と集団と言われ方のあった中で、個がすごく目立ってきている。それが重要になってきてしまってるんじゃないかという意味の教育の危機なんですね。

○千葉理事長 はい。

○山脇教育長 もう一点、教師、忙しいのは忙しい。いろんなことを抱えている。しかしながら、やらないといけないことはやらないといけない。何を除けるかというのは、考えないといけないところがあるだろうと。しかし、それを全部教師が放していってしまったのではどうか。人間性は教師の姿を見ながら子供たちは育っていった。

その意味からすれば、学力だけをつけているのが教師じゃなくて、やっぱり家庭的なものも含んだ中で教師は仕事をしていってるんじゃないかなという気がする。その中で、今、自尊心がありました。教師の自尊心といいますか、やる気、元気さをつけていくということで、今の評価があったんですが、やはり評価が一番。

○千葉理事長 いやいや、そんなこと。評価って手段といいますか、先生が自尊心を持っていただけたら、そんなことやる必要は何もないわけで、しかも第三者的に持ち込まないといけないのは、先生方の自尊心を持つための1つは手助けをしてることになると思うんです。

人に見てもらったらわかることがありますから、必ずしも足を引っ張るために評価はあるのではなくて、評価そのものを余り否定的に捉えてはいけません。次の段階に上るための、自分の足元を見るために光が要るわけで、その光を当ててもらおうといいますか、階段を照らしてもらうぐらいのつもりで、そのほうが手っ取り早いし、さっきの話じゃないけど、第三者的に見たほうが偏りがなくていいわけですから、手段として

使っていただければ。

人間ってどうしたってマンネリ化しますし、自分のやっていることはそんなに悪いと思わないで、自分を弁護します。その辺をチェックできるのは、第三者的にどうやこうやと意見を聞くのが一番早いと思います。

○市長 今日千葉先生のいろいろなお話の中に、これからの岡山市の小・中学生を育てるヒントが相当含まれてたんじゃないのかなと思います。大学生の活用にしる、どういうふうこれから、それらを具体化していくか、この会議の中でも十分詰めていきたいと思います。千葉先生、どうもありがとうございました。

協議事項2番目、これまでの会議の経過等について、ベネッセコーポレーションの西島さんから御説明をいただきます。

○ベネッセ（西島） ベネッセコーポレーションの西島でございます。

お手元に閉じものの資料がございます。こちらのほうをお開きいただければと思います。

第5回まで進めてきているところを振り返りましょうということで、資料をまとめさせていただきます。第1回から第5回に有識者の方、関係者の方から意見の聴取をしながら、弊社からも幾つかの御報告をしてまいりました。主な点としては、学力向上、問題行動、教員の負担軽減というテーマで御報告をしておりますので、それを振り返るという意味で、既に御提出をしております資料が大半、一部新しい情報も加えながら、岡山市の教育委員会様のお取り組みも資料の中に加えた形で資料を構成しております。この3つのテーマにつきまして、御報告をさせていただきます。

1つ目、4ページです。資料の構成としては、まずは岡山市教育委員会様が、現在、主として取り組まれていることを簡単にまとめており、その後、状況がこうだというデータの御説明にしたいと思っております。

岡山市の取り組みで、授業力の向上、チームを構成し、授業の改善ポイントを共有し、プリントをつくって、分析をし、指導教諭の活躍で、多くの学校の若い先生方の指導力の向上に取り組んでいらっしゃる、他の地区の事例に学ぶことをやっておられます。このような形でさまざまな取り組みをされており、次のページはサマリーで書いてありますが、次のページからのデータのことになりますので、6ページのほうをごらんいただければと思います。

総合教育会議の中では使いませんでした。既に皆様は御存じのところ、今年度の

学力調査の結果でございます。変化という意味では下のグラフをごらんいただきますと、今年度、一番右の平成27年度、小学校は算数Bが平均を超え、それ以外も、ほぼほぼ昨年度と同じぐらいの感じになってるかと思いますが、全国平均には届いていない。

中学校ですが、中学校はそれぞれ、よりよくなっている状況であります、全国平均からしますと、まだまだ届いていない状況がおわかりいただけるかと思いますが。

次のページからは、学校質問紙についての資料になりまして、9ページは学校の先生方の状況で、よくできているというところが、校内研修をしっかりと実施されている、あるいは少人数の指導が充実している、先ほどもありましたが、授業の改善のポイントとして、目当てやねらいをしっかりと提示をし、振り返りを行いましょうというところが、かなり徹底しているということがあります。

このような動きをされている一方で、次のページになりますが、改善が必要だと考えられる状況で、先ほど、校内研修、非常に充実していると申しましたが、校内でとどまっていて、外の新しい情報をしっかりと仕入れてくる動きがまだまだ不足しているのかなと思いますが、学校外での研修の参加は十分ではない状況。全国調査の結果を、学校全体でなかなか共有活用ができていない状況があるようです。

他県、他の地区で、いろんな学校さんにお邪魔したりしますが、やはり学校全体で全国調査のデータをしっかりと分析をし、それに対してどうするかということ動いてらっしゃる学校様が、やっぱり学力上がってまいります。先ほどからありました、PDCAサイクルを学校全体で回しているところが、非常に活性化をしていることとなりますので、その担当されてる学年だけではなくて、学校全体でどうしていくかが重要で、ほかの学年の先生方を本気にさせるには、小6、中3だけではなく、ほかの学年での学力調査を独自にやってらっしゃるところもたくさんあるかと思いますが。

次のページも改善が必要だということで、これは問題行動とも関係するかと思いますが、私語が少なく落ちついている状況にはなかなかない。特に中学校、全国と比べると落ちついている授業の状況ではないということが見てとれます。

これは小学校・中学校ともですが、校長先生が、先ほどの評価とかかわるかもしれませんが、校内授業を見て回っている度合いが非常に低いという状況です。

次のページは、全国調査とかかわりはありますが、ではないデータも含めて、クロスで見せております。講師比率、正規採用ではない先生方の比率を、都道府県ごとのデー

タがありましたので、それと全国調査の、国語A・B、算数A・Bの順位を並べてみたものです。岡山市様からも情報をいただいて、この辺に当たるという状況で、特に中学校では、この講師比率と学力との関係が非常にシャープに出ているかなと思います。講師比率が高いところは、成績も余りよろしくないというのが見えております。

次のページは、今度は子供の学習状況です。児童・生徒質問紙の中で非常に目立ったのが、しっかり書くところに対する苦手意識を持っている子供たちが多いというのが、小学校・中学校ともでございます。このあたりでしっかり書く、あるいはしっかり考えて書こうと努力をするところが不足をしている状況です。

それとともに学習時間、14ページです。長時間テレビ、ゲーム、スマホを利用してるお子さんが多い状況で、これは1日に3時間以上テレビを視聴している割合で、ランキングのような形にするのは適切じゃないかもしれませんが、特に中学校で、都道府県と市町村では当然状況が違いますが、全都道府県を並べた、さらに上に高いところに岡山市がある状況です。下も同様のデータですが、家庭学習時間にかかわるテレビやゲーム、メール等の時間が、岡山市の上位20%の学校と下位20%の学校を比較したときに、下位20%の学校では、特に中学校で非常に多いと前回御報告をさせていただきました。

学力に関してはこのようなところで、16、17ページ、一つ一つは触れませんが、学力に関する御報告に対しまして、皆様からこういった御意見やお考えを頂戴したところでございます。

続きまして、今度は問題行動になります。20ページになります。

まず最初に、岡山市様の教育委員会様のお取り組みで、未然防止にしっかり取り組まれ、また早期発見、早期対応をやり、さらに深刻化の防止で、大きく3段階の対策をとっていらっしゃるのと同時に、調査検証で、どのような事案があったか、しっかりとチェックをされてる状況でございます。

次のページはサマリーになりますので、飛ばさせていただきます、22ページ。御報告しましたときには、平成25年度の調査データまでしか確定をしておりませんでしたので、一番右の平成26年度は、まだなかったグラフを前回は御報告をさせていただきました。今回、平成26年度の最新の数字が入っておりまして、岡山市様、岡山県様ともに大きく下がってるといいますか、よくなってる状況です。

このグラフは、病院で治療を受けなければならないような暴力行為があった発生件数

と比率で見ただけであればと思います。いじめだとか不登校ですとか、さまざまな指標がありますが、外部の方とのかかわりの中で数字が明らかなもので、こちらを使わせていただいております。去年は少し上がっておりましたが、全体の流れとしては減少傾向に、明らかに入っておりますので、よい傾向かと存じます。

とはいえ、まだまだ全体の中では高いところにあります。県ごとの比較でいっても、赤い太いところが岡山県ですので、全体の中では、まだまだ多いほうに属しています。そこら辺の原因がまだまだ明確ではありませんが、全国調査のデータから見ましても、規範意識、学校の決まりを守っていますかというところ、全国に比べても悪くないといえますか、いいほうです。次のページの、人の気持ちがわかる人間になりたいかについても、中学校は当てはまるが若干全国で低いですが、それでもそんなに差があるわけではない状況です。

したがって、いわゆるまじめな子供といえますか、この数字でいうと、当てはまらないと答える子供たちの状況が他県とは違うのかなと。深みといえますか、重みといえますか、その辺が少し違うのかなと思います。

次のページの問題行動の提言のためにというのは、これは御報告をさせていただいたままです。香川県で、子供たちが中心になって、中学生が中心になって、さまざまなキャンペーン、動きをやっていますという御報告をさせていただいて、改善されていますという話をさせていただきました。

26ページは関連資料になります。地域とのかかわり、あるいは学習規律をしっかりやっていくことが、関係がありますよねという資料になっております。これらの御報告によりまして、27ページのようなさまざまな御意見を頂戴したところでございます。

続きまして、教員の負担軽減になります。

30ページで、岡山市教育委員会様の主な取り組みで、これまでは学校の教職員じゃなかった人たちが、外の方が学校に入って、さまざまな支援をする体制ができてきているということですか、先生方の負担になっていると思われる各種調査、文書類、アンケート類は削減する方向で動いてらっしゃる。

話題になりました学生ボランティア。これは、恐らく個人単位での動きだと思いますが、登録者が既に2,000人を超えていらっしゃるのはいらっしゃる。これが体系的にどう動いていくかですか、どの学校にどういうふうに入ってもらおうかとい戦略的な動きは、これから動いていくのかなと思っております。

続きまして、これ以降は岡山市のデータではなくて、文科省の調査データになります
が、先生方はこういったところに負担感を感じていらっしゃいますというデータが、
副校長、教頭が31ページ、32ページが教諭で整理をしております。

33ページは先生方の在校時間で、校長先生、教頭先生の在校時間が非常に長いこと
すとか、中学の先生、部活もありますので、非常に長いというところが出ております。

次のページは弊社の調査ですが、少し古いですが、教員の悩みで、教材の研究です
とか生徒たちと触れ合う時間をもっと欲しいというようなところでは。

35ページは特別支援教育、あるいは特別支援学級に在籍する児童・生徒の数で、これ
は県の数字になりますが、全国よりも多い、あるいは傾きが高い形で推移をしている
状況がございます。

次のページ、負担に感じる業務のまとめで幾らか整理をしておりますが、こういった
ところで、先生方は負担を感じていらっしゃる。

あとは、御意見になります。

すみません、戻って、問題行動の25ページをお開きいただけますでしょうか。今、
別々の項目でお話を申し上げましたが、25ページのグラフをごらんいただきますと、
全国調査として、小学校の秋田、中学校の福井、いずれもずっとトップを走ってい
らっしゃる両県ですが、どちらの県も問題行動が低いです。どちらもそうなんです
が、授業で子供をどう引っ張るかに物すごい力をかけていることと、少人数教育を充
実させているとおっしゃっております。つまり、先生と子供の関係を深くしていく
と。それを授業でしっかり深くしていくことをやることによって、問題行動が減
ったということとは言えないと思うんですが、もともと低いですが、そういったこ
とが問題行動が低いことにつながっていると言われております。

つまり、授業にしっかり集中できる学校環境をつくり、授業の質を先生方の力
で向上させていき、子供たちの力をつけていく。今お話をした3つのことが全
て解決できる状態が、恐らく秋田、福井なんだろうなと思います。別々のこと
ではなくて、関連したこととして考えたほうがいいかなと思っております。

以上で、報告は終わらせていただきます。

○市長 ベネッセさん、本当にさまざまな観点から、きちっとまとめていただき
まして、ありがとうございました。

項目を分けて御意見をいただきたいと思いますが、千葉理事長も、もしよろし
ければ、

この議論に入っていたいただければと思います。

まず、学力向上の面について、御意見をお願いしたいと思います。

どなたからでも結構ですが、山脇教育長、岡山市の学力の状況で、改善が必要と考えられる事項なども整理されてるんですが、それに対して何かお話がありましたらお願いいたします。

○山脇教育長　ここで御指摘のある、これまでのデータとしてお示しをいただいた内容も含めまして、学力の状況で、9ページ、10ページに今の岡山市の状況が出ております。11ページを含めて。できてるところできてないところでいえば、結局授業をつくっていく上で一番大切にしなければならない、いろんな人の授業を見合っ、そして授業力を高めていかないといけないと言えるんじゃないかなと思います。ところが10ページでは校外の研修。これは多分、授業参観も含めてだろうと思いますが、そういうところについてのものが十分ではないこともあります。

先ほどの千葉先生の話も共通する、学校全体の結果の共有が、まだまだ十分じゃないんじゃないかなと思っています。今データを持って、それぞれの学校の取り組み状況を見ていますけれど、細かくその中が、一つ一つをどこまで見ていくかが必要なんだろうと思っています。本当に御指摘をいただいた中身が十分じゃないだろうと思いますし、その後の私語であるとか、先ほどの千葉先生、これも共通する、子供がわかったという自己肯定感にもつながるかもわかりませんが、わかった、理解できたというところをすれば、授業にも十分入り込むことができるようになる。そういう授業づくりをいかに今やってるかどうかの一番課題といいますか、問題として、我々としては考えていかないといけないと思っています。

ちょっと長くなってごめんなさい、以前ある中学校で、なかなか授業に入らない子供がいた。ところが、その子供も、その学校で1週間にいっぺんずつ放課後補充学習を始めました。そうするとその子供は、その補充学習に出てもいいのかと、自分たちも出てもいいのかと校長さんに話をした。校長さんは、みんな来いよ来いよということで、入れてやる。それには参加するんです。やっぱり子供自身はわかりたい。自分もわかりたい、理解したい。ところが、まだまだ十分じゃないというところがあるんじゃないかなと思いますから、しっかりそこが、千葉先生の話ともだぶって、重複して、私は教育委員会としても考えないといけないと思います。

○市長　校内の授業を見回る校長が少ないのが、特に全国的に見ると圧倒的に低いんです。

先ほどのP D C Aのチェックの部分なんではないかなと思うんです。どうしてこういう数字が出てくるんですかね。

○山脇教育長 先ほど藤原委員も言われた校内での学校長のチェック、今、行っているはずですが、授業を見ないでチェックなんかできないだろうと思うんです。評価もできない。だけど、回数がほぼ毎日となってますから、毎日行ってるかどうかという問題でしょうね。しかしながら、やはり何らかの形で授業をそれぞれ見ないと評価はできないだろうと思いますから、回数が少ないという理由も調べてみないとわからないところがありますが。

○市長 どちらにしても、今後の改善点として一体何をするのか、来年度に向けての整理を、ぜひ教育委員会でもしていただきたいと思います。

ほかに何かございますでしょうか、学力の点。

○東條委員長 ずっと課題になってるのが、書きあらわすことが苦手な子供さんが多いとずっと言われてまして、そういうことに関する資料が13ページに掲載されています。上位校と下位校では、このような回答の比率の違いがあるということですが、例えば上位校で、こんな取り組みを割と継続的にしているとか、あるいは上位校の中学校区、小学校からこういうことやってるとか、これらは好事例に相当するものだと思いますが、それを継続的にやってるといふことだと思ふんです。

一回事務局で、そこら辺をどう整理して把握して、それをどう伝達しておられるかという工夫が、今のところあれば教えていただきたいと思うんですけど、いかがでしょう。

○指導課長 指導課長です。

今、各学校が、全国学テ等の結果をもとに改善プランをつくって、掲げております。これは教育委員会の指導課のホームページの中にも、全校の分を掲載してありますが、進捗状況を今後追跡をしていきたいと思っております。特に委員長がおっしゃられた書くことについて、各学校がどういう意識を持っているかをしっかり追跡していく方法もあるかなと思っております。

以上です。

○千葉理事長 子供たちがものを書く、文章を書くような機会って、どのぐらいあるんですか。例えば週に1回あるかとか、現場では。

○市長 教育委員会のほうで。岡林さん、お願いします。

○指導課長 小学校であれば連絡帳であるとか、中学校であれば生活ノート等に日々のことを振り返ったりして書く欄は設けてありまして、多くの子供たちが、そういうことをやっていると思うんです。授業の中で、自分の考えを、根拠を明らかにしながら書くという活動、ここが多少不足しているのかなという気はいたしております、それぞれの授業の中で、国語に限らず理科や社会の中でも、そういった活動がどんどん広がるようなことを、今後進めていきたいと思っています。

○千葉理事長 やっぱり書く、物すごい大事なことです。自分の頭の中のものを目に見える形にしてみせる作業って物すごい大事で、なかなか私らの子供のころから比べると、こういう機会が物すごく減ってるように聞いているんです。今おっしゃったみたいに、根拠を持って、きちっとしたものが書けるのは、それはできればすごいことで、でもそんな高望みをせずに、何でもええから書くという作業をやらせてみせる。それを積み重ねたほうが、いきなりちゃんとしたことを、起承転結できた文章を書きなさいなんか言うとは全然難しいので、まず何か書くという作業を日常化させることができればいいんだと思うんです。

○山脇教育長 書くことについては、小学校低学年からの積み上げが必要なんだろうと思うんです。日記指導なんかではよくやってくるんですけど、今、課長が言いましたように、ある面では何かテーマを決めて書くとなると、ちょっと苦手意識が出てくるんじゃないかなと思う。しかも400字詰めで2枚から3枚というと、ある程度の量を書きなさいと言っている。その積み重ねが足りてないところは、僕はあるんじゃないかなと思う。

○千葉理事長 何でもいいから、思いつきでもいいから、とにかく字を埋めろというのをやらせていけば、心理的な障壁がだんだんとれてくると思うんです。初めからちゃんとしたものを望むのは無理だし、かえって逆効果になるかわからん。

○市長 我々そうですね。

○千葉理事長 そうです。

○市長 日々書いてないと書くのがおっくうになってきて、果たして書けるのかという感じの思いが強くなってきますから、とりあえず書いてみるというのは重要だと思います。

○千葉理事長 何か書く、字にする作業が大事だと思うんです。論理があるとか、すごく人に訴えるものが盛られてないといかんとか、そんなのはもう少し後のステージで、

とにかく字にして見せることを、やるとやらないでは大分違うと思うんです。

○市長 先ほど、千葉さんがおっしゃった、理解をさせないといかん、この話と少し離れていくんですけど。理解させないといかん、理解させるとおもしろくなる。これは、藤原さんもそうおっしゃってるんですけど。

書くのは、それぞれが書いていけば何とかなる。ただ、理解させるということになっていくと、やっぱり理解度の早い子と遅い子が出ますよね。どうしても理解度の遅い子に合わせていくようになってしまうところがあるんじゃないですか。そうなると、理解の早い子が逆におもしろくないとか、そういう状態になってきますよね。そういうのは、どう考えるんでしょうか。

○千葉理事長 僕は、小学校低学年、3年生ぐらいまでは下の子の掘り起こしに重点を置くべきだと思うんです。中学校に入ったときには、どっちかというところできる子を伸ばしてやる。言いかえれば、小学校の間に、できない、ついて来られない子をつくらないといえますか、あるところまでは全部引き上げておいてやるのが小学校までの仕事で、そこがきちんとできれば、中学校もおのずと動くと思うんです。小学校の段階で落ちこぼれをつくってしまうといかんのだと思うんです。

○市長 確かに九九とか分数は小学校の低学年でできるかもしれないですけども、中学生も、あるものがわからなくなると、そこから次のステップに行けなくなりますよね。

○千葉理事長 だから、中学校でついてこれなくなってきたら、それが不登校だとか暴力行為に移ってる、問題行動に。多分、小学校の段階できちっとできてなくても、試験も何もないわけで、義務教育だから一斉に上がってしまうわけです。本人にしてみれば、周りを見ると、小学校のときこのぐらいだったのがこんな差になって、それが劣等感としてはね返ってくるという悪循環が起こっているのと違うでしょうか。

小学校、特に3年生ぐらいまでに落ちこぼれをつくらないといえますか、わからない子をつくらない。それは説明の仕方で、多少変えて、わかるように説明する回路が違ふと思うんです。頭に入る回路が。それを先生が受けとめて、この子はこの回路で教える、この子はこの回路でという、それはプロとして。3年生までが勝負で、少なくとも小学校6年の間に落ちこぼれをつくらない。そうすると中学校は、今度は伸ばすところに移れると思うんです。

○市長 どうでしょうか。

○藤原委員 さっき市長さんがおっしゃったのは、現実にあるんです。だから今は少人数

指導であるという形で、もっとわかりたい子と基礎的なことがわかっていない子の手だてを両方しようとしてるんだと思います。授業の形態としても、さっきの集団と個という考え方で、集団が育てば個も育つし、個が育てば集団も育つという理念で、いろんな形で協同学習のような形を取り入れていることもある。

それでも、岡山の特徴としては正規分布曲線じゃなくて、双こぶになるんです。低いところの割合も高い。だから、その子たちへということであれば、先生たちだけでできることも限られてきて、先生がおっしゃったような学校支援ボランティアの活用であるとかは、学校はやりたいし、しなくちゃいけないなというところに来てます。

あわせて、ベネッセさんの資料の負担感のところ。先生方がやりたいけども、下の子たちを何とかしたいけども、なかなか時間がとれないこともあるので、その負担感、特に37ページの丸の4つ目で、先生が負担と思うものの必要性を突き詰めて、要らないなら思い切ってそれを削除する。次の、先生が嫌がる仕事をやめる、これはちょっとどうかなと思うんですが、必要なことは嫌でもしないといけないとは思いますが。そのかわり責任を持つということで、さっき言うてくださったような評価システムなんかのところで、もっと広くほかの方が見られて、これは学校で必要ないよとか、もう少しスリムになるんじゃないかということ、このテストの結果をもとにして考えていくと、やった価値があるのかなと。

校長さんが授業を見回る時間が少ないといたりすることも、現場にいる人たちはやってみても、比べてみるとそうでなかったなということが調査項目からも出てきてます。そして、先生方が外へ研修に行かないのは、先生方の元気がないのは気の毒で、多分時間がないんだろうと。ということは、やっぱりそのあたりのスリムなことを、文科省もガイドラインで負担軽減を出して、特に一番負担感、国や教育委員会のアンケートもとか調査もとか言いながら、してはいても、やっぱり減ってないのが10年以上続いているんだろうと思います。だから、そのあたりを思い切って、岡山もアシスト事業が始まったので、あれの成果も見ながら、でもまだできることがあるのかなと感じております。

○市長 今の話は、例えば千葉さんのおっしゃった大学生の活用は、千葉理事長は家庭のかわりになるよという話をされましたが、藤原さんは、もちろん負担の軽減はあるにしても、どちらかという、2こぶらくだの後ろのこぶを小さくするほうに使ったほうがいいんじゃないかというような考えですか。

○藤原委員 そのほうが早道だろうと思います。ただ、本当に現場にいる子供たちも、いろんな意欲を持ってるわけですから、年齢の近い大学生からいろんな刺激をもらうことは必要だし、かえって今の教育技術を習っている学生たちから教職員が刺激受けることもあるので、このシステムがもしうまくできれば、とても有効だろうと思います。

ただ、課題はいろいろあって、どこが汗をかくのかとか、どういうふうな構築システムをしていくのかというのはあると思いますが、考え方としては、これからの方向として有効だろうと思います。

○千葉理事長 大学生でも個性がありまして、人間教育をやるのか、それとも学力をやるのかという話ですけども。それは大学生も人間教育と言われると、俺、何やったらいいのかわからないけど、算数だったら教えるよというのがいますから、それは2つ両方できる、やらせてみたらいいと思います。

ただ教育の現場は、先生が教えておられるわけですから、そこへ大学生が外から行って、先生方に変な負担をかけたたりしまったりする。そういうことが起こるのが怖いので、むしろ外でやったほうがええと思う。学校側が、この辺の低いこぶのところを何とか手伝わせてという形になったら、これは喜んで、学生はやると思います。

○市長 大学生を活用して余計先生の負担がふえるというのは、それは論外のことなんだろうと、私も思います。

○千葉理事長 それはだめ。

○市長 今の意見で、何か。

○藤原委員 学力だけで思ってるわけでは、もちろんないんです。でも一番有効だし、学生もやるのが見えてくるかなと。今でも部活動の参加とか人間性を高める上でも、たくさん出てボランティアしてると思うんです。すぐにやり方がわかって、子供たちと触れ合うことができるのは放課後学習とか、そういうところが大きいんじゃないかなと思います。

岡山市以外で土曜塾をやってるようなところが、岡大の学生が行って、寺子屋方式でやって、非常に効果が上がってる場所もあるので、手っ取り早いのはそこから入るのがいいんじゃないのかなと思います。

○千葉理事長 子供たちでも、切り離せないと思うんです。人間的な部分の触れ合いと、学力というか知識の修得の部分。切り離せなくて、子供にしてみれば、先生の言うことはなかなか耳に入ってこないし、わからないけども、大学生に言ってもらうと、何

だこんなことかというぐあいにはわかることってありますよね。

その辺はちょっと、学力と心理的な話が実は不即不離になってて、そういうことがあれば大学生と触れ合う中で、知識の修得もやらせればいいと思う。大学生なら、話を聞いて、何だそんなことだったのかと、こういうぐあいになりますよね。算数でこんなことわからない、これはこういうことだと学生が言ってみせるのと、先生が、これはこういうことだと学生が言ってみせるのでは、やっぱりいろいろなケースがあると思うんです。

○市長 そのほか、奥津さん、どうでしょうか。

○奥津委員 15ページで、僕はちょっと記憶になかったんですけど、岡山市内の上位校と下位校で、テレビやゲームの時間を分けたデータでして、こんなに差があるのかなと思ってびっくりしたんです。逆に下位校は、家に帰るとほとんど勉強はしてない。宿題も、これだとやってるかどうかよくわからない状態なんだろうなど。これは、もちろん子供自身の意識とかの問題もあるんでしょうけど、やはり基本的には家庭内で、親がある程度勉強の時間をしないといけない習慣づけをしてるかどうか、割と如実に反映されてるのかなという気が非常にしています。

確かに、そこら辺を学校でどれだけできるかというところはあるんですけど、ただ提出物だとか宿題だとか、そういうところをどれだけ管理して、また家庭にフィードバックして、家庭の中でもできるだけという形で。恐らく上位校は、ある程度そこがうまくできてる反面、なかなか下位校は、その辺うまくいってないのかなと予想はできるので、ここも1つのポイントにはなってくるのかな。県とかのあれで、スマホの制限とかいろいろとあるんですけど、要はやるべきことをやってるかどうかではないかと思いますので、そこはなかなかできてない状況にあるから、こういうデータになるんだろうなと思います。

○市長 学力の点だけを先ほど問題提起しましたが、あと問題行動、そのほか教員の負担軽減も合わせて、何かございましたらお願いいたします。

○山脇教育長 問題行動と学力は、多分切っては切り離せない問題ではあると思います。その中で今の問題行動を考えれば、先ほどから出てきている家庭での過ごし方、これはスマホだけに限らず、どう家庭に帰って過ごしているのか。ただ、家庭の構造が、今、なかなかおうちに帰っても、誰もおうちの中にいない家庭もたくさんになってきている。そこをどうしていくかというところ、これはある程度の習慣化も、先生言われた

ように、幼少期までのこともありましょうし、その後、やっぱり学校のほうでいかに補完をしていくか。

家庭学習も習慣化をしていくためには、どういう家庭学習がいいんだよということも、子供たちに指導していかないといけないんじゃないかということも思います。そういうこともしっかりやっていかないと、今ここで来ている問題行動等も少なくしていく、ゼロに近づけていくのはなかなか難しいんじゃないかと思います。

○市長 ほかにはどうでしょうか。

相手への思いやりというのが、全国平均に比べて多いのはうれしいですね。これが人間の感情の基本に当たるような気もいたしますし。

委員長、塩田さん、どうですか。よろしいですか。

○東條委員長 1つよろしいですか。データの確認も含めて、25ページでお示しいただいた香川県の取り組みの紹介していただきました。次のページに、問題行動提言のためにのところに、中段に、校長先生が校内の授業をどの程度見回ってますか、香川県が6割ぐらいで、岡山は3分の1ぐらいという感じになっていて、これが26年度のデータで、前を見ると岡山県はもっと減っちゃってるという感じになってて。これがそんなに、私、いきいき学校づくりなんかにお邪魔して、そうでもないような気はしているんですが、回答の仕方の偏りなのかなとも思うんですが。

一方で、先ほどから出てるように、授業を誰か人が見ているとか、授業してるときに、誰か評価はしてないにしても、自分のペースだけでひとりよがりになれない環境も、そういう形でできてるのかなと少し読んでみたりしています。

うろうろすればいいというものじゃないかもしれませんが、人目にさらされるのが結構大事なことで、このあたりは割とすぐに対応できるようなことなのかなと。少し先生方、校長先生に、先生方の授業をちょっと見てみてくださいというお願いをして、そこを執行していただくことは、ある意味では、いい意味での緊張感を持っていただける1つの要素にはなるのかなと思ったのは1つです。

そういうことをすると、下側の、先ほどの学習比率に関する御紹介もいただいたんですが、このあたりも少し上がってくる余地がありそうですし、管理職の先生が、もちろん無関心ではないと思いますが、少し校内を点検するというか見て回っていただくような活動をふやす意識を持っていただくだけで、ちょっと違うんじゃないかなという感じで、いただいた資料を拝見しました。大変貴重な資料でした。ありがとうございます

いました。

○市長 どうぞ。

○塩田委員 問題行動というお話だったんですが、私、10、11ページを見させていただいて、思うところがありました。全国学力・学習状況調査の結果を学校全体で、また教員間での活用が十分ではないというところです。学校でまとめられたものを、岡山市のホームページにアップされているということですが、実はずちの地域では、学校のまとめを、学力・学習状況調査のまとめを回覧板で回されました。これは、ことし初めて見たんです。何人の方がそれに注目されたかわからないですが、そういった形で、今、学校の状況は、学力・学習状況調査の結果がこうである、そして地域の皆さんへというところにも、ちゃんとこういうことを頑張っているのを支えてほしいということが書かれてありましたので、やっぱり、それは目をとめると思うんです。

それは学力のことだけじゃなくて、これがきっかけになって、問題行動とかそういったところに地域の方々の力をいただくためには、学校から何を発信するか、地域に何を発信するかをうまくやっていけば、いい関係ができるんじゃないかなと思いました。

○市長 そろそろ時間ですが、私も1点だけ言わせていただきたいと思います。

先ほど、千葉理事長の話の中に、仕事の棚卸しの話があったと思うんです。32ページを見ていただいて、先生の負担感の高い業務が、国や教育委員会からの調査やアンケートへの対応、そういうのが一番高くなって、次に研修会や教育研究の事前レポートや報告書の作成になっています。これらも全て不要とは、もちろんではないと思うんですが、こういったものを一つ一つチェックをしていただいて、来年度に向けて、何が負担の軽減につながるのかということ、少し整理をしていただければなと思います。そういう意味では各論で、これも各論といえれば各論ですが、もっとブレイクダウンした具体のものを整理すると、よりイメージが出てくるのではないのかなと思いますので、よろしく願いをいたします。

ということで、大体予定の時間となりました。特にということがなければ、今日はこのあたりで締めたいと思いますが、よろしいでしょうか。

ありがとうございます。

では、事務局にバトンタッチいたします。

○司会 大変ありがとうございました。

以上をもちまして、平成27年度第6回岡山市総合教育会議を閉会いたします。お疲れ

さまでございました。